

文化情報のデジタル・アーカイブの実践的研究[Ⅱ]

— 「郡上踊」における民俗芸能の伝承からの考察 —

A practical study of a digital archive of culture information[Ⅱ]

*1 *2 *3 *4

久世 均／久田 由莉／林 知代／松野 光暢

<和文抄録>

デジタル・アーカイブズにはいくつかの記録方法が考えられるが、多視点同時撮影によって、文化財や文化活動の様子・所作を正しく記録し、後世に残すことが重要である。そこで今回、文化活動の記録方法として、多視点同時撮影によって国の重要無形民俗文化財「郡上踊」の状況を記録し、更にそれらの情報を用いて”知”の伝承サイクルの確立のための総合的なデジタル・アーカイブズの開発について試行研究したので報告する。

<キーワード>

デジタル・アーカイブ、多視点同時撮影、記録、文化活動、共同利用

1. はじめに

あらゆる文化の基礎は、地域の伝統文化にあり、われわれはこれらの伝統の先端にあって、その伝統文化を同時代性でもって創造していくことが、文化の創造であると考えている。来るべき「成熟した時代」の日本文化を支えるものがこの伝統文化であるが、今日適切な手が打たれぬまま、それらが失われようとしている。

これらの文化に対する理解が本研究の基本である。そしてこの状態に際して、何らかの手を打つことが求められている。

ここでは、このような地域の伝統文化に関する“知”の伝承サイクルを支援するためのデジタル・アーカイブの技術的考察を「郡上踊」を例にして研究をしたので報告する。

2. 民俗芸能と文化の創造

伝統文化は、歴史のなかで常に同時代性ある文化として現在まで継承されてきた。それはそれぞれの地域の発展と成長とともにその形を創造的に変え、今日に継承されてきてい

る。今回取り上げた国の重要無形民俗文化財である「郡上踊」も同様に、郡上と言う地域の発展と共に創造的に変化しながら今日に継承されてきた民俗芸能である。

従って、この研究は「郡上踊」の歴史的な文化遺産をデジタル・アーカイブしたのではなく、『伝統の先端にいる現在において生活している人が創造している文化』をデジタル・アーカイブしたものであり、地域における民俗芸能の伝承をみたものである。そしてこのような民俗芸能こそが、支援されていくべきものではないかと考える。

しかし、伝統文化を伝承するためには、伝統文化は地域や生活と密着した文化であるが故に、単なる資金助成は伝統文化には必ずしも良い効果を生むとは限らない。伝統文化における創造と発展、これがそれぞれの地域の個性ある文化の創造であり、地域の創造、活性化の源である。全国のなかでも比較的伝統文化が豊かに継承されている飛騨地区の白山文化が、それらを同時代性ある活動として活性化していくことで、多様で豊かな社会を創

論文受理日：平成19年1月17日

*1 KUZE, Hitoshi: 岐阜女子大学 e-mail=hitoshi@gi-jodai.ac.jp *2 HISADA, Yuri: 岐阜女子大学

*3 HAYASHI, Tomoyo: 岐阜女子大学, *4 MATSUNO, Koucho: NPO 法人地域資料情報化コンソーシアム

りあげることが期待される。

また、本学がそのような地域社会を形成していく活動に対して、適切な形で協働してあげるとすれば、それは非常に大きな意義を持つものである。

「郡上踊」は、中世の「念仏踊」の流れを汲むと考えられている。盆踊りとしての体裁が整えられたのは、八幡藩主の奨励によるとされる。江戸時代初期の藩主・遠藤氏が領民親睦ため奨励したのが発祥とも、江戸時代中期の藩主・青山氏が百姓一揆後の四民融和をはかるため奨励したのが発祥とも伝えられるが、定かではない。

「郡上踊」は、郡上節を演奏する囃子の一団が乗る屋形を中心に、自由に輪を作り時計回りに周回しながら踊る。会場が街路の場合もあるので、輪は円形とは限らない。踊りには曲ごとに定型がある。振り付けの基本は簡素なので、初心者や観光客でも見様見真似で踊ることができるようになる。装束は男女とも浴衣に下駄履きが標準的だが強制ではない。踊りへの参加は完全に自由で、飛び入りや離脱に規制はない。通常、見物人よりも踊り手の方が圧倒的に多数である。

「郡上踊」の際に演奏される囃子を総称して郡上節と言う。



写真1. 郡上踊 (かわさき)

「郡上踊」の楽曲には、「かわさき」「春駒」「三百」「ヤッチク」「古調かわさき」「げんげんばらばら」「猫の子」「さわぎ」「甚句」「まつさか」の10曲がある。対応する踊りは、それぞれ異なる。なお「まつさか」は終演の曲目である。囃子の構成は、三味線・太鼓・笛の伴奏に唄囃子・返し言葉・掛け声。伴奏がない曲もある。

また、郡上節が演奏される屋形は、可動式の木造2層寺社風構造であり、永年使用される。開催日毎に会場に移動し、適所に設置される。開催期間以外は八幡町内の専用倉庫に保管されている。

3. 地域の民俗芸能の記録技術

これまでの記録作成のための支援は一過性のものが多い。ところが踊りにしても民謡にしても、芸の質は問われても、規範的な唯一の演奏というのはいない。ただ一度だけの記録では、芸能が固定化してしまう恐れがある。少なくとも同じ演者で複数、そして演者を変えて複数の録音やビデオの撮影をすべきである。また、記録は祭り本番の実況だけでなく練習も撮影することが重要である。このような、芸能が完成していく記録は伝承にも役立つ。また、できれば記録はプロの撮影者に委託するのではなく、地元の人々のおこなうことがよい。地元でも、行政の人ではなく、自ら行っている人々、その人自身が周囲の人の手を借りて行うことが望まれる。生涯学習の一環として記録にかかわることも必要である。

また、時々しか使わない高価なビデオの機材をそれぞれの市町村で持つより、デジタル・アーカイブセンタなどを作って貸し出しをする方法もある。そこで記録作成のノウハウを学ぶための講座を開くことも有益である。また、できあがった撮影記録の保存・公開の情報センターも兼ねるとよいと考えられる。

4. “知”の伝承サイクルとデジタル・アーカイブ

民俗芸能の中には、伝承者と被伝承者の距離が離れすぎて、教授がうまくいかないことがある。伝統的な伝承方法はまず「見て覚えて」「まねて覚えて」「繰り返して覚えて」というやりかたであるが、身近に見る機会のない現代の子供達には難しい。といって、新しい教授方法を考案したところで、今度は伝承者の方がそれを活用することができない。そこで両者をつなぐデジタル・アーカイブ化が必要となってくる。デジタル・アーカイブ化の手順は、まず、踊りの記録を作ることから始まる。次に、オーラルヒストリーの作成に取り掛かる。これは、自らが伝承者に実際に

習いながら、踊りで注意すべきことや所作の名称などの聞き取りをする。

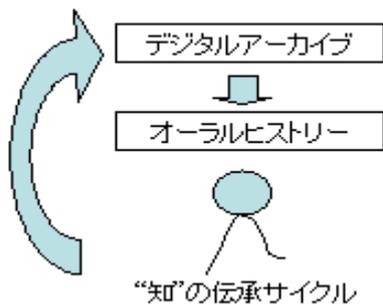


図1. “知”の伝承サイクル

このとき同時にビデオをとる。これらの記録をもとに、分析して基本的なパターンを取り出すことが重要である。

伝統的な教授方法では、いつでも演目の頭から練習するが、デジタル・アーカイブによる伝承は、子供にパターンの練習から始めさせることが可能となる。笛では音のだししかたのこつや、指使いと音の関係などを飲み込ませてから、やはりパターンを教える。子供のなかに、ある程度蓄積ができてから、演目を教えることが重要である。デジタル・アーカイブはここまでで、それから後は、子供自身がデジタル・アーカイブ化された映像を使って次の世代を教えることが可能である。そして、本当の演目は伝承者から習うことになる。ここまで基本訓練ができていると、伝承者から習うことが可能になる。つまりこのような“知”の伝承サイクルを地域で行うことが、生活の中で芸能を自然と身につけることをしなくなった今日では重要な要素となるのである。

5. 高品位ビデオにおける文化活動の記録

デジタル・アーカイブにおいて大切なことは、なるべく高品位な映像で保存することである。現在ではハイビジョンカメラも安価で購入できるようになったが、本学では平成10年度からハイビジョンカメラでの文化活動を記録している。ハイビジョンカメラは、操作する上では、これまでのビデオカメラと比べると大きな違いはない。文化活動の記録においては、所作の一部を拡大して表示することも必要になることから高品位のデジタル・ハ

イビジョンでの撮影が必要とされている。



写真2. デジタル・ハイビジョンカメラ(右側)

ハイビジョン撮影におけるデジタル・アーカイブにおける留意事項は次のような点である。

①デジタル・ハイビジョン映像の記録・保管・提示は、従来のビデオ映像と代わりがないが、データ量が多くなり、画像処理における速度が課題となる。

②高品位なハイビジョン映像により、その映像から静止画を取り出し、静止画のデジタル・アーカイブが可能となる。

③外部記憶装置が大容量で安価になってきたことにより、ハイビジョン映像のデータベース化も始められてきた。

④多視点ハイビジョンカメラ

高品位で精度の高いハイビジョン映像は、その特性を活かした多様な処理が始まってきた。

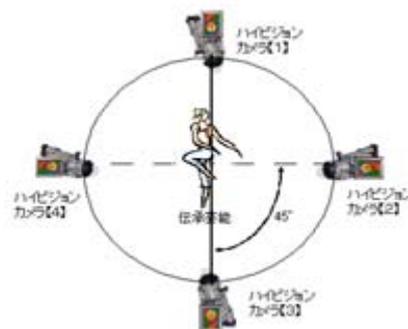


図2. 多視点ハイビジョンカメラ

特に、同一画面から多視点から撮影した2～4画面の映像を提示し、文化活動等の動作や所作の検討が進められるようになってきた。

今後、この多視点ハイビジョンカメラの映

像を元に、任意視点映像生成システムとしての視点からの映像を生成するシステムへと発展していくと期待している。

6. 重要無形民俗文化財「郡上踊」の事例

(1) 多視点動画撮影の実践

国重要無形文化財「郡上踊」のデジタル・アーカイブ化は、下記のような日程で撮影した。

日時：平成18年9月23、24日

会場：郡上市総合文化センター

内容：国重要無形文化財 郡上踊

参加協力：郡上おどり保存会

ここでは、8方向静止画同時撮影及びデジタル・ハイビジョンカメラにおける4方向動画撮影を行った。ここでは、4方向動画撮影について説明する。

- ① 撮影するために、会場の中心を決定して、影が出ないように、照明機器の方向を調整する。また、「郡上踊」の場合は特に、下駄の音が重要であるためバウンダリーマイクを設置する。



写真3. バウンダリーマイクを設置

- ② 中央から45度を測定し、円周上にカメラを設置（測定した位置にテープで印を付け、テープが三脚の中央になるように三脚を設置する。）



写真4. カメラの設置

- ③ 被写体の位置に被写体の代わりになるものを置いてカメラの調節を行う。



写真5. カメラの調節

- ④ 8方向のカメラはマニュアルで完全に同じ設定にする。（ホワイトバランスの設定）



写真6. ホワイトバランスの調整

- ⑤ 実際に囃子を入れて、音の調整をする。



写真7. 囃子の音の調整

- ⑥ 実際の撮影



写真8. 郡上踊の撮影

(2) 撮影に関する留意事項

撮影に関する留意事項については次のようである。

<準備>

- ①会場内の光を発する箇所全てを幕で覆う。(非常口など)
- ②外からの明かりが漏れる隙間をテープで貼る。
- ③8方向に設置されたカメラの三脚部分には黒いテープを貼る。
- ④コード類はなるべく写らないように配置し、つまづかないようになるべく壁際に沿った状態をテープで固定する。(光沢のない黒いテープがよい)
- ⑤中央から45度を測定し、円周上にカメラを設置(測定した位置にテープで印を付け、テープが三脚の中央になるように三脚を設置する。)
- ⑥8方向のカメラは同じ高さになるよう、メジャーで測って固定する。(今回は床が水平であるためレーザ光線を使う必要はない。)
- ⑦カメラは必ずACアダプタで電源を取る。
- ⑧被写体の位置に被写体の代わりになるものを置いてカメラの調節を行う。
- ⑨8方向のカメラはホワイトバランス・シャッタースピード・しぼりともマニュアルで完全に同じ設定にする。

【ホワイトバランスの設定方法】

- (1) 被写体の位置で白い紙を撮影し、この映像を元に1台目のカメラでホワイトバランスを設定する。
- (2) 2台目以降のカメラに①のメディアを入れ、同じ映像を元にホワイトバランスを設定する。
- ⑩ズームとピントを合わせたら移動しないようテープで固定する。
- ⑪ビデオの設定はプリセットにする。(今回は照明がタングステンであるため)
- ⑫照明は被写体が動く円周上で均一になるように調整する。
- ⑬照明を中央に集めることによりカメラで撮影したときに周りが暗く写るのでカメラがほとんど写らなくなる。
- ⑭マイクテスト。マイク1台1台に対して行う。

<撮影時>

- ①撮影が始まったらスタッフは暗幕の外に移

動し、モニタのみで確認する。

- ②1曲(4~5分)で約40枚~100枚を撮影。
- ③1曲ごとに8方向カメラの撮影枚数を確認する。
- ④容量に余裕を持たせてメディアを交換する。
- ⑤ビデオカメラ(4台)は同時に撮影を開始し、撮影開始から約1時間でテープを交換する。
- ⑥スイッチャーは黒い幕の切り込みから覗く形で踊りのポイントでシャッターを切る。
- ⑦カメラマンは黒い幕の切り込みからレンズだけを出して撮影する。
- ⑧スイッチャー・カメラマンはなるべく黒っぽい服装の方がいい。

(3) 映像の連続変化

①



②



③



写真9. 郡上踊りの連続写真

7. 「郡上踊」におけるオーラルヒストリー

「オーラルヒストリー (oral history)」とは、この分野における第一人者として知られるエセックス大学のポール・トンプソンによると、これを「記憶を歴史にする」ことであると定義している。また、中国・台湾においては一般にこれを「口述歴史」と表現している。すなわち、「オーラルヒストリー」とはある個人にその体験を口述してもらい、これを記録、分析する一連の作業を総称することといえる。

この「郡上踊」における“知”の伝承サイクルには、このオーラルヒストリーが必要となる。つまり、このプロセスは、伝承者に実際に習いながら、踊りで注意すべきことや所作の名称などの聞き取りをする。このとき同時にビデオをとることである。これらの記録をもとに、分析して基本的なパターンを取り出すことが重要である。

この、オーラルヒストリーを研究に用いる利点について、東京大学の清水氏は、第一に文字資料が存在しない、歴史にとって全く「未知」のを知りうる点。第二に、文字資料のみでは知りえない情報を得ることができる点。第三に、聞き手が存在する点。第四に、話し手の人生、価値観などを体系的に把握することが可能。など4つに分類している。

こうした利点を通して、「郡上踊」における単位映像資料では不可能であった範囲まで広げていくことができるのがオーラルヒストリー総体としての利点として挙げられる点である。今回のオーラルヒストリーは、郡上おどり保存会の会長である藤田正光氏に、撮影した映像を見ながらインタビュー形式でオーラルヒストリーを撮影した。



写真10. 撮影風景



写真11. インタビュー



写真12. 所作の説明

8. おわりに

以上、デジタル・アーカイブは、文化財、文化活動を美しい映像や資料で後世に残すことも必要であるが、現実を正しく後世に残すことが最も重要である。また、これらのデジタル・アーカイブ化された映像を使った“知”の伝承サイクルにより新しい文化の創造へ発展をさせる機能を持つ必要がある。

尚この研究は、平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の一環として行った研究であり、主に久田由莉と松野光暢が「郡上踊」の研究・調査・資料収集、久田由莉、林知代が「郡上踊」のデータ処理を担当し、久世均が論文のまとめを担当した。この論文・資料の作成にあたっては、岐阜女子大学の後藤忠彦教授の指導によりで行った。また、郡上おどり保存会の会長である藤田政光氏には撮影の機会を与えていただいたことに厚く感謝の意を表します。

参考文献

- 1)久田他：文化活動等のデジタル・アーカイブ化のための多方向同時撮影について
日本教育情報学会第22回年会 Aug26-27, 2000, PP246-247
- 2)清水唯一朗：日本におけるオーラルヒストリー
文部科学省学術創生研究, 2002-2006